

Ⅲ 第 6 回 鯨 関 する 座 談 会

主 催 水 産 海 洋 研 究 会

日 時 昭 和 4 0 年 7 月 9 日 午 后 1 時 3 0 分 ~ 5 時 3 0 分

場 所 極 洋 捕 鯨 協 会 議 室

話 題 お よ び 話 題 提 供 者

海鷹丸による南極洋調査報告	奈 須 敬 二 (鯨 研)
昭和 39 / 40 年度南極洋捕鯨の概要について	奈 須 敬 二 (鯨 研)
オ 19 南鯨漁場における気象概要と特徴について	馬 場 邦 彦 (日 本 水 産)
太陽黒点極大極小期における日本近海の鯨漁況変動について	渡 瀬 節 雄 (大 洋 漁 業)
総 合 討 論	座 長 大 隈 清 治 (鯨 研)

1. 海鷹丸による南極洋調査報告

奈 須 敬 二 (鯨 類 研 究 所)

オ 2 回 の 南 極 洋 生 物 ・ 海 洋 調 査 は (実 際 に は 、 宗 谷 の 随 伴 船 と し て 、 南 極 洋 調 査 を 実 施 し て いる から 3 回 目) 、 昭 和 3 9 年 1 2 月 1 日 か ら 2 月 8 日 (目 視 観 測 は 2 月 1 4 日 ま で) に 至 る 期 間 、 次 の 様 な 調 査 が 行 な わ れ た 。

1) 目 視 観 測

- イ 氷 山 お よ び バ ッ ク ・ ア イ ス
- ロ 変 色 水 (生 物 の 密 集 に よ る)
- ハ 海 獣 類
- ニ 鳥 類

2) 測 深 、 海 底 地 形 お よ び 底 質

3) 地球物理

- イ 地球磁場の測定
- ロ 海上重力の測定

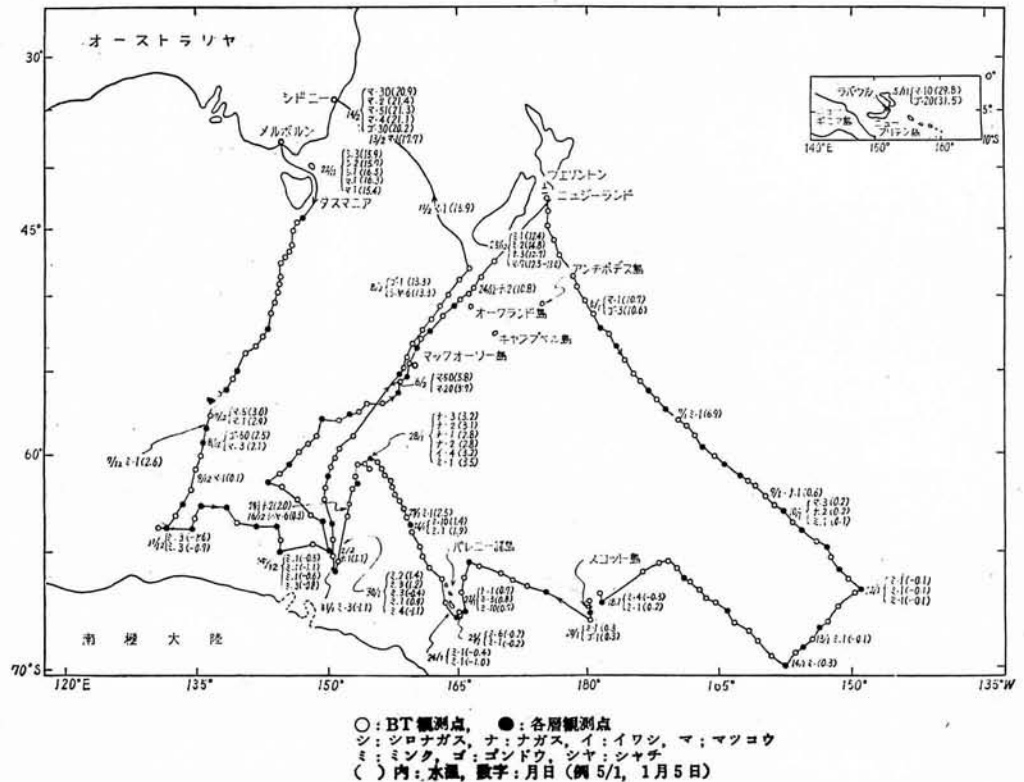
4) 気象観測

5) 海洋観測

- (1) 物理 (G E K による海流測定を含む)
- (2) 化学
- (3) プランクトン (主として Euphausia) および魚類
- (4) 照度
- (5) D. S. L. s
- (6) 懸濁物

6) コンパス関係 (磁気およびチャイロを含む)

7) 水中写真



第 1 図 調査航海と発見鯨の位置。

8) 漁業試験

以上の調査項目の中で、こゝでは鯨関係についての報告をする。

発見鯨種とその分布

オ1図に、調査航跡および発見鯨の分布を示し、オ1表に鯨種別発見頭数を示した。なお、同表の緯度別区分は、亜熱帯収束線以北（40°S以北）、南極収束線から亜熱帯収束線の海域（40°—55°S）および南極収束線以南（55°S以南）を示している。

発見頭数は、大型鯨シロナガス：7、ナガス：20、イワシ：4、マッコウ：113、小型鯨、ミンク（コイワシ）：80、ゴンドウ：155、シャチ：12で、調査期間に対する発見数としては非常に少ない。シロナガス鯨は、全頭40°S以北のシドニーからメルボルンに至る海域で発見されたもので、推定体長（70—75°呎）および分布域から推定してビッグミー・シロナガス鯨と言うことも考えられるが、観察が不十分なため、詳細は不明である。

オ1表 鯨種別発見頭数

	シロナガス	ナガス	イワシ	マッコウ	ミンク	ゴンドラ	シャチ
40°S以北	7	0	0	89	0	30	0
40°—55°S	0	5	0	11	3	4	6
55°S以南	0	15	4	13	77	121	6
計	7	20	4	113	80	155	12

注) 熱帯域のマッコウ10、ゴンドウ20を除く。

ミンクの大部分は南極収束線以南の、特にバック・アイス周辺で発見され、165°W—180°の海域に発見の少なかつたのは、バック・ラインまでの調査を実施していないことに起因しているものと考えられる。

なお、通常知られているミンクは、手羽（胸ビレ）に白い色彩を有しているが（*Balaenoptera acutorostrata*）、南極洋にはその色彩を有しない全体黒色のクロミンク（*Balaenoptera bonaerensis*）も分布しているが、今回発見したミンクに、そのクロミンクが含まれていたかどうかは不明である。

マッコウは、113頭のうち89頭が40°S以北の低緯度で発見され、その海域における群構成頭数は、単独：2、2頭：1、4頭：1、30頭：1および51頭：1となつていて、30頭以上の群は、推定体長から判断して、大部分がメスから構成されている。本調査海域における、メス（推定体長から判断）の分布南限は35°Sであるが、捕獲記録から約50°S付近まで分布していることが知られ、この海域は他に比較して特に高緯度まで分布している（通常マッコウ鯨のメスは、50°N以北および50°以南に分布することは稀である。

調査結果に対する考察

本調査海域は、戦前および戦後（1960/61年度漁期まで）の主なヒゲ鯨漁場（マッコウ鯨などの様な歯を有する歯鯨類に対し、ナガス鯨などの様な、歯の代りにヒゲを有する鯨をヒゲ鯨と呼ぶ）であつた。

同海域における最近の調査が実施されていないため、資源の状態は不明であつたが、今回の調査から、少なくともシロナガスおよびナガス鯨の資源は、利用に適しない程度に減少しているものとみられる。

次に、イワシ鯨の発見は、一群四頭のみで、近年高緯度への回遊量が増加傾向にあるといわれる本鯨種にしては、非常に少ない結果となつている。勿論、本調査のみから、当海域の分布が少ないと結論づけるには早計である。考えられることは、南極洋へ回遊するイワシ鯨は、季節的に遅いため、本調査が比較的早い時期に終了していることである。

南極洋のニュージーランドおよびオーストラリア域は、ザトウ鯨の濃密な分布域であり、過去の資料による分布域を、本調査においては比較的充分調査したことになるが、一頭の発見もなかつた。

また、近年ニュージーランドおよびオーストラリアにおけるザトウ鯨の捕獲量が、急激なる減少傾向を示している。ニュージーランドおよびオーストラリアにおいて捕獲されるザトウ鯨が、それらの海域と東西方向に移動することなく、南極洋との間を、季節的に南北回遊することは、数多くの標識結果から明らかにされている。また、南極洋におけるザトウ鯨の捕獲は特別に以前から国際捕鯨条約で制約を受け、また1963年度漁期から、全面的に捕獲が禁止された。この様に、南極洋のザトウ鯨は、他の鯨種に比較して非常に厳しい捕獲制約をもうけて保護されて来たにも拘らず、今回の調査で発見されなかつたことは、何らかの理由でその資源は非常に減少していると解釈される。

注）本文は、すでに発表した鯨研通信165号の一部である。

2. 1964/65年度南極洋捕鯨の概要について

奈 須 敬 二 （鯨類研究所）

今漁期における出漁団数は15船団で、捕獲は表一に示したようにヒゲ鯨6984 B.W.U（B.W.U＝シロナガス換算で、その基準は次の通り、シロナガス：1.0＝ナガス：2.0＝イワシ：6.0＝ザトウ：2.5、マッコウ鯨は適用されない）、マッコウ鯨8820頭である。ヒゲ鯨の中では、表二から判るようにイワシ鯨の捕獲増加が特に顕著となつていて、昨年度の捕獲のほぼ2.4倍に相当する19845頭、この数字は南極洋捕鯨における最高値である。